

ルヲ善トス

○羅鍼ヲ以テ位置ヲ定ムルキハ唯タ二法ノミニテハ誤謬ニ陥リ易キモノナルコトヲ銘記セサルヘカラス何トナレバ唯ニ方位ノミナルキハ或ハ測量シタル方位ノ孰レカニ誤謬アルコトモアルヘク或ハ自差ヲ加減スルニ際シテ誤謬ヲ生スルコトモアルベク或ハ其測得方位ヲ海圖上ニ記載スルノ際ニ誤謬ヲ招クコトモアルベクレバナリ故ニ是等ノ誤謬ヲ防カンニハ念ノ爲メ今一個他ノ物體ヨリ第三ノ方位ヲ取ラサルヘカラス(海岸又ハ諸危険近傍ニ於テハ殊ニ此事ニ注意セサルヘカス)此ノ如クニシテ其三方位線一點ニ交合セバ即チ始メテ爰ニ誤謬ナシトシテ安必スルコトヲ得ヘシ

○英國海軍用ト同式ノ原基羅鍼ヲ備エタル艦船ニ於テ夜間位置ヲ定ムルニハ洋燈ヲ支エル爲メニ用ユル三脚架ヲ以テ極メテ必要ノ具

トス此三脚架ノ助ケアレバ晝間ハ同様精密ニ方位ヲ測ルコトヲ得ベシ又近寄ル所ノ船ニ於ケル燈火ノ方位ノ變化ヲ定ルニモ此三脚架ノ必要ナルコトヲ忘ルヘカラス

○天測ヲ以テ船ノ位置ヲ定ムル方法ノ中ニ於テサムナー法(サムナー法 緯度ヲ測ル法)ノ効用ノ至大ナルコトハ決シテ等閑ニ付スヘカラサルコトトスサムナー線トハ即チ太陽ノ方位(アジマス)、テールヨリ得タルト直角ニ船ノ位置(一個ノ假定緯度ト經線儀經害ニ依リ得タル)ヲ通シテ引ケル線ニシテ其航海上ニ於ケル効用ハ實ニ至大ナルモノトス何ントナレバ船ノ眞位置ハ必ス此線上ノ何所カニ在ルハ明カナレバナリ今其一例ヲ舉ケンニハ天測ヲ行フト同時ニ水深測量ヲモナシ置クトキハ之ヲ海圖上ノ水深ト照ラシ合セ此サムナー線上ニ於テ直チニ船ノ概位ヲ知得ルノ場合少シトセサルナリ

○サムナー法ハ尙ホ亦一個ノ方法ニ依リ早朝ノ中既ニ甚ダ精密ナル位置ヲ示スノ用ヲモナスコトアリ其法トハ即チ黎明地平線明カナルトキ先ツ一輝星ニ依リテ一經度ヲ測リ次ニ又太陽ノ地平線上數度ニ上リシキ復タ之ニ依リテ一經度ヲ測リ斯クシテ得タル兩位置ヲ通シテ各一個ノサムナー線ヲ引クト是レナリ而シテ此時太陽ハ星トノ方位ノ差角若シ三點以上ナルトキハ此兩線ハ實ニ一大好結果ヲ與フルノ媒介トナルベシ

其十二 羅鍼偏差ノ變更

○方位ニ依リ海圖上ニ位置ヲ點記スルニ當リテハ羅鍼偏差ノ年ヲ經ルニ從ヒ漸次變化スルノ事實アルコトヲ忘却スヘカラス夫ノ迅速ニ位置ヲ點記シ針路ヲ畫ク等ノ用ニ供スル爲メ海圖上ニ抽畫セル

數箇ノ羅鍼牌ハ年ヲ經ルコト久シケレバ右ノ事實アルガ爲メニ皆些少ノ誤差ヲ見ルニ至ルベシ而シテ小尺度ノ海圖ヲ用ユルトキハ若クハ長キ方位線ヲ引クヘキノ場合ニ於テ若シ此事ヲ度外ニ置キテ省ミサルトキハ或ハ非常ニ位置ヲ點シ誤ルノ虞ナシトセス抑モ海圖上ノ羅鍼牌ハ偏差ノ變化四分ノ一點ニ達シタルキ始メテ之ヲ改刻スルモノニシテ其變化是レヨリ以内ニ在ル限リハ即チ改正セサルモノト知ルベシ蓋シ銅版上同一ノ處ニ屢々改正ヲ施スコトハ到底ナシ能ハサル事ナレバナリ

○世界ノ某所ニ於ケル羅針偏差ノ地理的變化ニハ甚タ迅速ナルモノアリ即チニューファウンドランドヨリフアリアクスニ向ツテ赴カントスルトキニハ行クコト未タ五百里ナラスシテ羅針偏差ニ於テハ既ニ十度ノ變化アルナリ故ニ艦船斯ノ如キ場所ニ航海スルト



時ニ運動スルノ必要ヨリ各船ノ速力ヲ規定スル場合ニハ此原速力ヲ以テス即チ原速力十裡ト規定スレバ各船之レヲ基礎トシ前記ノ比例ニ由テ半速微速等ヲ規定スルナリ又經濟速力ナル者ハ一種便宜上ノ速力ニシテ消費石炭ト發動速力ヲ比較計算シ石炭ヲ要スルコト比較的少ク速力ヲ發スルコト比較上大ナル中庸ヲ取リタル者ニシテ是ハ通常全速力ノ四分三ナリ

●通信

其一 電信

電信ハ最モ迅速確實ナル通信法ニシテ各國現今軍事通信上最モ之レ

電信ノ利

ヲ採用ス其利益トスル所ハ左ノ如シ

- 第一 通信距離遠大ナリ
- 第二 距離ヲ遠伸スルコト易シ
- 第三 通信所ノ位置ヲ撰定スルコト容易ナリ
- 第四 非常ノ天候ニアラサルヨリハ使用シ得
- 第五 音信ノ跡存留ス
- 第六 通信迅速ニシテ確實ナリ

電信ノ不利

其不利トスル所ハ左ノ如シ

- 第一 線路ノ建設ニ巨多ノ材料人員時間ヲ要ス
- 第二 敵兵殊ニ土民ノ妨害ヲ被リ易シ
- 戰時軍用ニ供スヘキ電信ハ分テ三線トス
- 第一線 野戰電信

第二線 兵站電信

第三線 國用電信

此等電信ハ野戰及守城戰ノ場合ニ從ツテ多少ノ其應用法ヲ異ニス  
 第一線ノ電信ハ本營ト其前方諸要點トヲ連絡スルニアリ例ヘハ一軍  
 ノ駐止スルニ當ツテヤ電信交通ヲ要スル主要ノ諸點即ハチ本營、師團  
 司令部、旅團司令部等是レナリ時トシテハ前哨本隊、前哨中隊、分遣哨等  
 ニ至ル迄電信ヲ設置スルコトアリ是等ノ爲メニ前哨電信ト稱スル輕便  
 ナル電信ヲ用ユヘキナリ  
 電信ノ送受時間ハ大約二十分ヲ要シ傳令騎兵ハ此時間ニ大約六吉米  
 ヲ經過シ得ルカ故ニ之レヨリ以下ノ距離ニ在ツテハ電信ノ効用頗ル  
 減殺スヘシ蓋シ夜間又ハ道路險惡ナルトキハ素ヨリ例外トス  
 第一線ノ電信ハ終始軍隊ト共ニ進退シ第二線即ハチ兵站電信ハ第一

野戰ニ電信  
 ナ應用スル  
 場合

攻城ニ電信  
 ナ應用スル  
 場合

線電信ト第三線電信トヲ連絡シ第三線即ハチ國用電信ハ第一第二線  
 ノ電信ヲ内地ノ要塞又ハ陸軍諸官廳ニ連接スルニ在リテ普通電信吏  
 ノ任スル所トス  
 攻城間ハ電信線ヲ以テ本營ト各部隊及各部隊間ヲ連絡シ尙ホ前哨兵  
 及ビ砲臺團迄之ヲ伸長スルヲ良トス是レ所謂第一線電信ニ應ズ  
 此電信中敵彈ヲ受クル患アルモノハ木框内ニ收容シテ塹溝内ニ埋沒  
 シ通信所ハ盲障舍内ニ置クヲ要ス  
 攻城本營ハ攻圍セル要塞ニ通スル交通路殊ニ鐵道線ニ沿フテ設置セ  
 ル電線ヲ利用シテ後方監視隊及策源トノ交通ヲ維持ス乃ハチ第二線  
 電信ニ應ズ  
 要塞ハ平時ヨリ電信線ヲ以テ分派堡其他ノ諸要點ヲ連絡シ守城ニ際  
 シ更ニ臨時架設電信線ヲ以テ要塞司令官扇區司令官及砲工兵指揮官

守城ニ電信  
 ナ應用スル  
 場合

ノ位置其他觀測點、臨時堡壘砲臺等ヲ連絡シ以テ防禦動作ヲ敏活ナラシム

海岸防禦ニ  
電信ヲ應用  
スル場合

海岸ノ要點ニ平時ヨリ海岸望樓ヲ設置シテ海軍ノ所管トシ以テ艦船ノ運動ヲ觀望シ海上船舶ト交通シ又電信ヲ以テ内地ニ連絡シ平時ニ在ツテハ航海ノ利便ヲ爲シ戰時ニ在ツテハ敵艦ノ動靜ヲ迅速ニ知悉ス

其他海岸要塞ノ防禦ニ於テ電信ハ最モ必要ニシテ各司令部、砲臺、水雷營所、電燈場等ヲ連絡スルコト陸地要塞防禦用電信ニ同ジ

電信ノ破壞

電信ノ交通ヲ全ク廢絶スヘキ大破壞ハ軍司令官又ハ獨立師團長ノ命令ニ依ル電信ノ破壞ハ其方法至難ナラズ多クハ臨機ノ所置ヲ以テ足レリトス

電信ノ破壞ハ主トシテ騎兵ノ任スル所ナリ之レカ爲メ騎兵ハ破壞器

具ヲ携帶ス

通信所ヲ破壞センニハ電槽及通信機ヲ破壞スルヲ以テ足レリトス線路ヲ破壞センニハ電信柱數本ヲ破壞シ其電線ハ遠距離ニ放棄スレハ可ナリト雖モ認出シ難キ障害ヲ數所ニ設クルヲ却テ有利トス例ハ裸線ナレハ金屬線ヲ以テ兩電線ヲ連絡シ或ハ之ヲ大地ニ連絡セシメ又被覆線ナレバ之ヲ強引シテ内部ノ心線ヲ切斷シ地中線ハ切斷セラル后原位ニ埋設シ置ク等是レナリ

一通信所ヲ奪取スルヤ其書類ヲ收集シ或ハ之ヲ利用シテ敵軍ヲ欺ク等ハ素ヨリ臨機ノ處置トス

電信ノ破壞甚シキモノハ之ヲ修理センヨリハ寧ロ更ニ新設スルヲ迅速ナリトス

通信所ノ修理ハ殆ンド困難ニシテ通信機ノ如キハ到底修理スルコト

ヲ得スト雖モ電槽ハ材料アレハ急造スルコト至難ナラズ  
電線ハ諸種ノ電氣的試験ニ依リ其障害ノ位置ヲ探知シ適當ノ修理ヲ  
施シ又碍子ハ玻璃盃又ハ茶碗ヲ利用スルモ可ナリ

其二 電話

電話ハ電信ニ比スレハ材料單簡、使用容易、通信迅速ナルノ利アリ然レ  
ル又左ノ弊アリ

- 一、音響其他微細ノ障害ニ感動ス
  - 二、音信遺留セス
- 第一ノ弊タル音響ニ感スルモノハ特別ノ談話室ヲ設クレハ大ニ之レ  
ヲ醫スルヲ得ヘシ第二ノ弊ハ常ニ必要ナルモノニアラス要スルトキ  
ハ速記法ヲ應用スルモ可ナリ

歐洲諸國ニ於テハ屢々軍用上電話ノ實檢ヲ施行シ現今各國共所謂前  
哨通信ニ利用シ或ハ野戰電信ニ併用スルモノアリ

其三 視號

視號ハ往古ヨリ多ク軍用ニ使用シタル通信法ニシテ方今電信電話ノ  
應用セラル、ヤ其効用ヲ減少セシガ如シト雖モ視號ニハ特別ノ性能  
長所アリテ尙ホ軍事上其必要ナル者寡シトセス殊ニ海軍ニ於テ專バ  
ラ視號通信法ヲ用ユ

視號通信法ハ信號ト回光ノ二種ニ大別スルヲ得ベシ而シテ其方法一  
ニシテ足ラスト雖モ今其二三ヲ説述スベシ  
信號通信 多ク實用ラル、者ハ晝間ニ在テハ旌旗夜間ニ在ツテ信號  
燈トス軍艦交互ノ通信及陸地トノ通信ハ專バラ此方法ヲ用ユ

回光通信 回光通信ハ光線ヲ利用シテ遠距離ニ通信ヲナスニ在リ  
 回光通信ニ於テ考究スヘキモノハ光線ノ性質ト回光機械ノ構造ニア  
 リ  
 回光通信用ノ光線ハ單位ノ光力最大ニシテ其光彩ハ水蒸氣ノ爲メニ  
 吸收セラレサルモノヲ良トス之レニ應用スヘキ光線ニ種々アリ即ハ  
 チ「Drummond」燈、マグネシウム燈、石油燈、電燈及ビ月光等ナリ其他日光  
 モ光線ニ利用シ得ベキコトハ實驗ノ證スル所ナリ  
 回光機ハ光線ヲ斷續シテ「モールス」符號ヲ發セシム而シテ他ノ通信所  
 ヨリスル通信ヲ識別シ又タ勉メテ其通信距離ヲ増伸セシムル爲メニ  
 諸裝置ヲナス  
 視號通信所ノ位置ヲ撰定センニハ最大ノ注意ヲ要ス  
 一般ニ左ノ要領ニ依ル

電燈光力ハ  
 日光ノ二分  
 一又ドラモ  
 シン又ドラモ  
 シン又ドラモ  
 五倍ハ七十

第一 展望ノ自在ナルヲ  
 第二 敵眼ニ觸レサルヲ  
 第三 兩通信所ノ距離ハ所用器械ニ適スルヲ  
 第四 近傍ノ火光及ビ發烟ノ爲メニ通信ヲ妨ケサルヲ  
 回光通信機ノ有効距離ハ氣象ニ從ツテ大ニ變化ス中等氣象ニ於ケル  
 距離大畧左ノ如シ

距離 (米)	晝		中徑 珮米	機械種類
	日光	燈油石		
15	15	8	10	凸鏡式
30	30	10	14	
40	30	12	20	
60	40	15	30	凹鏡式
60	40	15	35	
80	50	18	45	
100	50	20	60	

此距離ハ電燈式ヲ用ユレバ  
 更ニ増加スルヤ明ナリ



視聽通信ノ利害

視聽通信ハ天候ニ依テ通信ヲ妨ケ音信ヲ遺留セス又豫報ナク通信遲緩ナル等ノ弊アリト雖モ電信ニ比スレハ材料單簡ニシテ敵ノ爲メニ通信ヲ斷絶セラル、ノ患ナキ等特別ノ効用アルガ故ニ野戰、攻城、守城等之ヲ應用スルノ時期多シトス

其四 軍用鴿

鳥類中鴿、燕、鷹、鴨、鷓等ハ舊巢ヲ愛スルノ天性ヲ有ス就中鴿ハ其最モ秀逸ナルモノニシテ古來之ヲ以テ音信ノ送受ニ供シタリ然レモ軍用上其ノ必要ヲ喚起セシハ實ニ巴里攻城ノ時ニ在リ爾來歐州諸國競テ軍用鴿舍ノ編成ニ從事シ現今軍事通信上須要ノ地位ヲ占ムルニ至レリ遠距離ヨリ自己鴿舍ノ方位ヲ定ムル鴿ノ能力ハ其主因果シテ何レニ在ルヤ未ダ確説ヲ得スト雖モ其ノ想像ノ諸説ヲ舉クレバ大約左ノ如

シ

天賦 視力 感觸 記憶 電氣

軍用鴿ニ要スル性能

其他種々ノ説アルモ未ダ一定ノ確説ヲ得ル能ハズ要スルニ鴿ハ前述ノ諸能力ヲ併有セル特別ノ知覺ヲ享有スト云フヲ以テ足レリトス鴿ノ飛行ハ頗ル迅速ニシテ通信上最モ必要ノ性質ヲ有ス五〇〇乃至六〇〇吉米以下ノ徑路ニ在テハ其中等速力毎分一千米ニ達ス可シ實ニ其ノ大速力ハ以テ其ノ脆弱ニシテ自衛ナキ不利ヲ償フモノトス此速力ハ經過距離ノ増加スルニ從ヒテ減少シ又空氣ノ現象及風ノ方向ニ從テ變化スルモノトス逆風ニ在テハ五〇〇乃至六〇〇米順風ニ在テハ一二〇〇乃至一四〇〇米ニ達ス可シ  
最良ノ鴿ハ左ノ外形ヲ備フルヲ要ス  
一 兩翼ノ伸長ニ比シテ體軀ノ小ナルコト

- 二 羽翼ノ完全ナルコト
  - 三 兩翼強壯ナルコト
  - 四 兩脚健全ニシテ羽毛ナキコト
- 鴿ノ羽毛色ハ至大ノ必要ナシト雖トモ白色ナルモノハ左ノ利益アリ
- 一 遠距離ヨリ認見ヲ得
  - 二 友鴿集合ノ記號タルベシ
  - 三 羽翼ニ附記セル記銘ヲ分別シ易シ
  - 四 太陽ノ光線作用僅少ニシテ強熱ヲ感セズ
- 近距離ニシテ一定セル兩通信所ノ交通ニ在テハ一鴿ヲ以テ往復ノ通信ニ供スルヲ得ベシ即ハチ之レニ使用ズベキ鴿ヲ連續數月間此兩點ニ閉居セシメ其一點ニ於テハ水ノミ給シ又他ノ一點ニ於テハ食餌ノミヲ給スルキハ遂ニ鴿ハ一點ニ於テ飲水ヲ求メ他點ニ於テ食餌ヲ求

鴿ヲ以テスルニ通信法

ムルニ至ルベシ一般ニ採用スベキ最モ確實ナル方法ハ開戰前豫メ國內諸點ノ鴿ヲ互ニ交換シ要スルキハ之ヲ放還セシムルニ在リ

書信ハ之ヲ鴿尾ニ裝着シテ送達ス其ノ裝着法ハ各國多少異ナル所アリ

佛國ニ於テハ長四乃至五珊米ノ鴿管ヲ鴿ノ中央尾羽ニ插入シテ其全長ノ半ニ至リ其信紙方六乃至二〇珊米ノ薄紙ヲ疊折控回シテ其ノ一端ヲ尖形トシ駐楔ノ如ク鴿管内ニ插入シ尙ホ要スルトキハ小狀片ノ駐楔ヲ挿嵌シ封蠟ヲ以テ其ノ兩端ヲ閉基ス

顯微寫真術ヲ以テセバ書信ノ重量一瓦ニシテ千五百行ノ書信ヲ携帶セシムルヲ得ベシト云フ之ニ用ユル書信ハ勉メテ暗號ヲ用ユルヲ可トス

獨國ニ於テハ一端閉塞セル管ノ兩端ヲ絹糸ヲ以テ鴿羽ノ下方ニ結着

シ其閉口端ハ封蠟ヲ以テ閉口シ閉口端ノ絹糸ハ該管ヲ貫キ其ノ滑脱ヲ防ケリ

凡テ放鴿ハ晴天ヲ撰ミ午前ニ於テスルヲ可トス然レモ戰時緊要ノ場合ニ於テハ薄暮又ハ雨雪天ト雖トモ放鴿セサル可カラズ此時ニ於テハ其翌朝適良ノ時期ヲ撰ンデ更ニ同一書信ヲ裝附セル鴿ヲ放飛シ其音信ノ到着ヲ確保セサル可カラズ敵兵ノ爲メ獲ラル、ノ恐レアルハ全一ノ書信ヲ付セル三鴿ヲ相異ナル位置ヨリ全時ニ放ツテ可トス鴿ノ飛行中種々ノ障害アリテ其ノ行進ヲ遲滯シ或ハ失跡スルコトアリ其ノ首要ナルモノ左ノ如シ

山岳 氣象 河海及森林 鷲鳥

然レトモ使鴿ハ何レノ時期ニ於テモ軍用ノ通信ニ供スルヲ得ベシ

飛行中ノ障  
害

其五 輕氣球

輕氣球ハ近來軍事上其ノ必用ヲ感セシヲ以テ各國ハ競テ之レヲ研究シ其ノ裝置ハ益々改良進歩シ己テニ輕氣球隊ヲ設置セシモノ寡カラ

繫留氣球  
自由氣球

輕氣球ハ繫留氣球ト自由氣球ノ二種トシ自由氣球中誘導氣球ト稱スルモノアリ而シテ現今專ラ軍用ニ供セラル、モノハ繫留氣球トス繫留氣球ハ氣球、水素發生機及ヒ氣球ノ昇降機ノ三部ニ區別スルヲ得自由氣球ハ繫留氣球ノ如ク地上ニ繫留セズ自在ニ空中ヲ浮遊行動スルモノナリ自由氣球ハ風向ニ順ツテ行動スルモノト記動器ヲ裝置シ所望ノ方向ニ進行スルモノ即ハチ誘導氣球トノ二種アリ起動器ナキ自由氣球ハ繫留氣球ノ繫留索ヲ切斷セルモノニ異ナラズシテ全ク風向ニ從ハサルヘカラス故ニ出行ノ際各高度ニ於ケル風ノ

方向速力ヲ知ルヲ要ス此事タル至難ニシテ往々不測ノ危険ニ罹ルコトアリ

誘導氣球ハ彼ノ船ノ如ク其行路ヲ隨意ナラシムルモノニシテ實ニ輕氣球ノ完備セルモノ即チ真ノ風船ト稱スベシ現今ハ頗ル進步ノ兆アリト雖ドモ未タ軍用ニ供スル如ク完備ノ域ニ達セス

氣球ヲシテ風力ニ依ラス自ラ行動セシメンニハ船舶ノ如ク其形狀ヲ延長シ強力ナル起動器ト推進螺ヲ利用スルヲ要ス是等ハ頗ル困難ナル問題ニシテ未タ完全ノモノヲ見ス

氣球ノ轉位ハ其固有速力ニ於ケル轉位ト風力ニ於ケル轉位ノ合併セシモノナリ

氣球ノ固有速ハ起動器ノ強弱氣球ノ形狀大小ニ關ス

氣球ノ固有速力風ノ速力ヨリ大ナルトキハ風向ニ逆ルヲ得ヘク即チ

城塞戰ニ輕氣球ノ應用

野戰ニ氣球

如何ナル方向ニモ進行スルヲ得ヘシ然レドモ未タ如斯完備セシモノナシ

是故ニ誘導氣球ハ彼風帆船ノ如ク風ノ速力ヨリ微少ノ固有速力ヲ以テ曲折迂廻風向ニ逆ル能ハスシテ到底可進角外ニ出ツルヲ得ス

攻城軍ハ繫留氣球ヲ以テ敵ノ出撃砲兵ノ位置、彈着點ノ觀測等ヲナシ守城軍ハ敵ノ運動、作業ノ進歩、砲兵ノ位置ヲ視察シ又之ヲ視號通信ニ利用シ要塞内外交通ヲ維持スルヲ得ヘシ

自由氣球ハ殊ニ必要ナリ乃チ攻城軍ハ攻圍線ノ某點ヨリ風向ヲ利用シテ城塞ノ上方ヲ飛過シテ遂ニ攻圍線ノ他點ニ降下セバ城塞ノ偵察容易ナリ守城軍ニ在ツテハ自由氣球ト使鶴ヲ利用セハ要塞内外ノ交通ヲ維持スルコト容易ナリ

野戰間氣球ヲ以テ偵察勤務ニ使用セバ其ノ利益ノ大ナルヤ論ヲ待タ

ノ應用

サル所ナリ  
 數日行程前方ノ偵察ハ誘導氣球ヲ使用シ敵ノ配置、機動及大城塞ノ編成ニ關シ完全ノ偵察ヲ爲セハ戰畧上ノ利便大ナルヘシ之レ已ニ米國南北戰ニ於テ實施セシ所ノモノナリ  
 又兩軍相對スルニ當タリ繫留輕氣球ヲ昇揚シ敵ノ陣地ハ勿論後方各部隊ヲ仔細ニ偵察シ電話ヲ以テ之レヲ軍隊司令官ニ通信セハ其ノ利益ノ大ナルヤ明カナリ  
 輕氣球ニ依ル精細ナル寫眞測量ハ軍事上最モ有益ナルヤ明カナリ殊ニ城塞周隣地形堡壘砲臺ノ位置等ヲ知悉スルハ不完全ナル報告ノ比ニアラス  
 近世數多ノ實檢ニ依レハ輕氣球ニ依ル速寫々眞術ハ頗ル完全ナルニ至レリ

輕氣球ニ依ル寫眞

輕氣球ニ對スル射擊

自由氣球ハ高ク昇揚セハ銃砲火ノ危險ナシト雖モ繫留氣球ハ然ル能ハス故ニ勉テ砲兵ヨリ隔離シ其高度及位置ヲ變換スルヲ要ス但氣球ハ假令敵彈ヲ受クルモ漸次降下シ決シテ乗球者ニ危害ヲ及ホスコトナク其破孔ヲ修理スルコト容易ナリ

### 基本戰術摘要解義第五卷終

明治三十三年八月七日印刷  
同 年八月十一日發行

基本戰術摘要解義與附  
(正價壹冊金五拾錢)



著者 雲外居士

發行兼印刷者 東京市京橋區五郎兵衛町二十一番地  
小林又七

印刷所 同 陸軍省御構内  
小林又七出張所

發賣所 同 麴町區隼町二十一番地  
小林又七支店

同 仙臺市南光院町四番地  
小林又七出張店

(電話番町一九二)

85
33

73



85  
55

